

---

# 救済の七つ道具～セブンス～

deffend

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

救済の七つ道具〜セブンス〜

### 【Nコード】

N6321S

### 【作者名】

def fend

### 【あらすじ】

西暦2050年、化石燃料の枯渇化により日本は重大なエネルギー不足になっていた。しかし、内閣総理大臣 小木政俊が過去に発明した発電機により、日本は難を逃れた。その一方、その高性能さゆえに、政治家達は怠惰な茶番論争を繰り返すばかりだった。事件が起こるまでは・・・

## (前書き)

このドンマイ過ぎる文章はメインが行き詰ったためにできてしまった、しょうもないものです。

西暦2050年

日本は3年ほど前から消費税が10%に引き上げられた。財政難を少しでも良くしようとした結果、これに至ったのだ。反対する議員はもちらん多くいた。しかし、2030年に成立した独決法により、時の内閣総理大臣 小木政俊がそれに至ることに成功する。

独決法・・・それは、議員の過半数が国家に何らかの危機が起こる、もしくは発生しかねないと判断したときに発令される法。この法が発令されると、内閣は立法の全権を得ることができる。小木たち内閣陣は議員を買収してこれを成した。国民たちはこれにより、さらに過酷な格差社会へと追い込まれたのだった。しかし、小木の支持率は85%を超える高支持率を維持している。それを可能としているのは研究者として彼の作った革命的な発明品・・・自立稼動式浮遊発電機”アンブレラ”があるからだ。アンブレラは全長20kmの巨大な太陽光発電機で、名通り傘の形をしていて、高度10000m上空の日本領空内を浮遊している。自己発電した電力により巨大な100基を越えるプロペラを稼働させていて、浮遊に必要な電力は発電で得たエネルギーのおよそ5%しかない。残りの95%を地上に送信しているのである。化石燃料が枯渇し始め、火力発電が廃れた日本にとってはこのアンブレラは、アンブレラを設計した小木は救済者なのだ。光の裏には闇がある。小木もそれに当てはまる。彼はアンブレラ設計の成功により、莫大な資金を得ていた。その資金は脅威たる隣国達の大使へ媚びるための物へとなっているのだった。これは、日本を売り渡すための布石。そう判断した者達がい

5月4日

品川にある聖城大学付属品川高校・・・私立トップ大学の聖城大学、その附属校の中庭の隅に一人の端正な顔立ちの少年が立っていた。艶のある黒髪のスタンダードな長さの髪をねじったりして弄っていたが、ポケットから鳴り響く携帯の着信音にビクツとしていた。彼の隣に座っている、ベージュ系の淡い茶色の髪をした灰色の瞳の少女がそれを見て、クスクスと笑っていた。

「笑うなよ、聖<sup>せい</sup>」

少しむつとした表情をして言う。

「あははは！だってすごくびっくりしてたんだよ？こう、ビクツって！」

ジェスチャーを入れて心底楽しそうにしている。ひとしきり笑った後、満足した彼女は言った。

「あー、笑った。ねえ、いい加減私を睨むのはやめて、携帯出たあげなよ」

聖と呼ばれた少女にそう言われた彼はずっと鳴りっぱなしだった携帯をとる。

「もしもし、どうした情報屋<sup>ハッカー</sup>？」

『ターゲットのスケジュールを手に入れた。そちらに情報を送るか  
ブレインと通話相手に呼ばれた少年、<sup>ブレイン</sup>頭脳』

泉堂鎮<sup>せんどうしず</sup>は悪戯な笑みを浮かべた。

『了解した。指揮官<sup>コマンドー</sup>の報告によれば”プラント”の性能は最高峰らしいが、使うか？』

『いや、お前が作っていた”缶コーヒー”を使う』

通話相手、ハツカーの返答に不満なのか、鎮は疑問の言葉を投げかける。

「なんでだ？あれは下手したら関係ない人まで被害が出るぞ？」

「スケジュールから導き出したことだが、ターゲットは朝、人が少ない公園で缶コーヒーを飲むのが癖らしくてな。くくく・・・いい鴨だと思わないか？」

携帯越しに愉快気な声が響く。その声を聞いた鎮は少し安堵の表情を浮かべる。

「てつきり、失敗作で終わるかと思ってたけど、役に立って何よりだな」

『そうだな、大好きな”缶コーヒー”で逝けるんだ、何よりだろう』  
くはははは！と盛大な笑い声がした後に通話が切られる音がした。

「神楽さんすごいご機嫌だったね」

通話を終えた鎮に隣の少女、聖が微笑を浮かべて声をかけた。

「ああ、なんか気味悪いな」

神楽・・・ハツカーと鎮に呼ばれた人の名前。鎮と聖、神楽はかなり親しい間柄と言える。鎮と聖は同じ家アジトに住んでいて、神楽もそうだ。家族に近い関係かもしれない。

夜、アジトと呼ぶにはあまりにも大きい豪邸に鎮たちは集まっていた。そこには7人の年齢がバラバラな男女が円卓に着いていた。

「ブレイン、作戦が整ったようだが、内容は？」

渋くこついい体格をした中年の男性が鎮に問いかける。鎮は作戦内容を聞いてきた男性に視線をむけた。

「それは・・・」

作戦内容を説明し終えた鎮に、聞いていた一人が声を荒げる。

「ふざけんな！なんでそんなことをしなくちゃならないんだ！？」

「そう興奮するな、ハッカーよ」

初老の、白髪交じりのオールバックヘアの男性が諫める。

「しかし、セレブ！」

「良いではないか。たまには羽目はずすのも。それに明日こそ我々7つ道具セブンスが舞台上がるときなのだ。着飾るのも時には必要だぞ？」

「・・・ちっ」

ハッカーは舌打ちをするとししぶしぶといった様子で席に着く。作戦は明日の早朝に開始される。

「では、皆の者。明日の早朝4時30分にここ、春日部邸に集合だ。北沢君と久我山君は大変だろうが、くれぐれも寝坊などせんようにな？」

若い黒髪に翠色の眼をした男性と、中年のごつい男性に、セレブと呼ばれた初老の男性が注意をする。

「わかつていますよ、春日部医師せんせい」

北沢と呼ばれた青年は気を引き締めた表情でそう答えた。

「おうとも！」

ごつい中年の男性、久我山が北沢の返答に頷く。

「うむ、よろしい。では、解散！」

セレブ・・・本名、春日部高臣たかおみの宣言により、作戦会議は幕を閉じた。

本村聖は会議が解散したあと、自室に籠もっていた。（ああ、始まってしまっ。私の望んでいた平穏がこれから崩れ去ってしまう）彼女の頬に涙が伝う。ベットの上で枕に顔を押し付けていた彼女に、

コンコンというノックの音が聞こえた。

「どうぞー」

彼女の言葉を聴きノックをしていた人物が部屋へと入ってくる。

「奈緒ちゃん・・・」

入ってきた人物、赤澤奈緒。紅い髪のショートヘアーに碧色の眼をした美少女が聖の目の前まで、近づいてきた。

「聖、泣いてたの?」

奈緒は沈んだ表情で聖に質問する。

「う、うん。だって恐れていた日が来てしまったから」

俯き答える聖。

「聖、もし私達が捕まったりしたら、鎮と一緒にどこか遠くに逃げて・・・」

「そんな、そんなこと出来るわけない!」

頭を横に振り、目から雫をこぼす聖。そんな様子の彼女を見た奈緒は「ごめんね」と言うと、扉を開け、静かに出て行った。室内には悲劇のヒロインのような、むせび泣く少女の声が響いた。

5月5日 AM6:30

「ただいまキャンペーンで、新作のMONDAエスプレッソをお配りしていまーす!」

有楽町駅のすぐ目の前の広場でキャンペーンガール達が新作の缶コーヒーを配っている。白いミニスカにぴちつとした白いシャツ、ハッカラー・・・神田神楽は現在そんな、露出の高い恥ずかしい格好をしていた。(くそー!なんで私がこんな恥ずかしいことをしなくてはならないのだ!?)彼女は昨日の作戦会議で鎮に言い渡された役割を聞いて怒った。

『ハツカーは都合よく空いたキャンペーンガールになって、ターゲットに缶コーヒートを渡してもらおう』 『大丈夫だ、ハツカーはミス東大の美人だから』 『ターゲットは鼻の下を伸ばして近づいてくるだろうな』

彼女は昨日鎮に言われた事を思い返していた。(あゝ！よくもあんなむかつく事をべらべらと！) 彼女は年下の男の子に女の子として褒められると、何故か腹が立つらしい。彼女は内心では文句を言っているが、任務はしっかりこなしている。

『ただいま新作のエスプレッソをお配りしているのですが、いかがですか？』

にっこりと、通りかかった中年の男性に笑いかける。

『お、おお。すまないね』

中年の男性は顔を紅くして、上機嫌に去っていく。

『よっ別嬪さん！』

彼女の耳に耳栓のような感じでくっ付いている、無線機から若い男性の声が出る。

『別嬪さんというな、コマンダー』

『いやーホントのことを言っただまだけだなー』

『貴様、社会的に抹消されたいらしいな』

神楽はイラついた声で相手、コマンダーを脅す。

『わー！悪かつたって！』

『わかればよろしい。．．．ところで、狙撃手はちゃんと所定の位置に着いたのだろうか？』

『もちろん。対警官用に備えているはずだよ』

そうか、とつぶやくと神楽は近くの喫茶店のオープンテラスで彼女をじっと見つめている二人組みを見た。(ブレインと侍女か。どうやら私がちゃんと渡せるか見ている様だな)

『神楽、ターゲットだ』

彼女の耳にターゲットの接近を告げる声が聞こえた。鎮は自分の護衛役の聖と共にスタバのオープンカフェでカフェラテを飲んでいた。

「神楽さんきれーだねー」

聖が神楽を見ながら言った。

「ミス東大だしな」

鎮はぶつきらぼうに答える。神楽を見ていた鎮の視界に意外な人物が入ってきた。

「！あいつは・・・」

カフェラテを飲みながら、鎮は携帯に番号を打ち込む。

「スナイパー、準備しておけ。小木の側近、永塚透議員だ」

彼が目撃したのはターゲットではないが、ターゲット候補の人物だ。

『了解』

短い、そっけない返答が来る。鎮はそんなことは気にせず、永塚の服装をスナイパーに説明した。

「どうやらターゲットに合流しそうだな。聖、コマンダーに連絡を」

「う、うん」

説明を終え、通話を切った鎮は聖にコマンダーに連絡するように促した。

「新作のエスプレッソです。いかがですか？」

神楽は営業スマイルを浮かべ、ターゲットに缶コーヒーを差し出す。

「うん？新作か、中々うまそうじゃないか。ありがたくもらっとくよ」

にたにたした顔でじろじろと神楽を見ながら缶コーヒーを受け取るターゲット、一条直哉衆議院議員。小太りで背の低い、よくいる中年だ。（あー気持ち悪い。じろじろと厭らしい顔して見やがって）彼女は纏わりつくような彼の視線に嫌悪を示していた。

『よし、神楽は速やかに撤収しろ』

「言われなくてもわかってる」

不機嫌に言っと、彼女は大またでその場を去った。

緑化が進み、有楽町の駅の近くにも大きな公園が建てられた。その

公園の少し開けたベンチの上に一条直哉は腰をかけた。今日彼には秘書にも話していない極秘の会談がある。日本のアンブレラを狙う国々に対する案を小木総理の側近と話し合うことだ。

「はゝ憂鬱だなー」

彼の言葉はもつともかもしれない。世間ではゴールデンウィークという安らぎの日々があるのに対して、彼には日本の行く末を話し合う密談が控えているのだ。

「ストレスがあゝ・・・はあ、そういえばこれ配ってた子美人だったなあー。ああいう子好みなんだよなゝ、名前くらい聞いとけばよかった。ちえつ、ツイてねー、ツイてねーよ！」

そう言うと彼は缶コーヒートのプルタブを思いっきり引いた。

ピピツという音がした瞬間、爆発が起きて彼の体はバラバラの肉片へと姿を変えた。

「ひゃあああああゝゝ！！！」

「うわあああー！！！」

その悲惨な光景を目撃した人々はパニックを起こし、逃げ惑った。

「なんだ！？何があつた!？」

すぐ近くまで来ていた永塚議員はパニックに陥っている人々を退かしながら、その惨状の現場へと足を運んだ。（なんだ、これは？人・・・なのか？なぜこんなことが、この国で・・・）彼は死体に近づいた。そのとき彼は死体に着いているあるものを発見した。（これは・・・議員バッチ？ま・・・まさか!？）彼がその考えに至った瞬間、けたたましい銃声に彼の意識は途絶えた。

ひどい惨状だった。バラバラ死体と額より上が消し飛んだ男性の死体……。鎮はそんな惨状を少し離れた場所で、ただただ眺めていた。隣にいる聖は口を押さえて目から涙を零さないように、必死にこらえていた。そんな彼女の様子を察したのか、彼は同じく近くまで来ていたスナイパー……。赤澤奈緒に彼女を預けると、死体の良く見える場所へと移動した。

「俺たちはお前達のような人間から、この国を救わなくちゃならない」

彼のつぶやきはそよ風にかき消された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6321s/>

---

救済の七つ道具～セブンス～

2011年4月21日20時40分発行